

新美南吉・作 のら犬 より抜粋

常念坊は門をはいると、

「正観、正観。」

と、庫裡のほうへむかってどなりました。

「はい。」

とへんじがきこえて、正観が、ごそごそ鐘楼からおりてきました。

「おい。きつねだ、きつねだ。ほうきをもってこい、ほうきを。ほうきで追いまくれよ。」

正観はとんでいって、ほうきをもって、門のほうへかけつけました。

「おや。きつねがなにか、くわえていますよ。」

「ああ、だんごだ。とりあげろよ。」

「はい。下へおけ。——だんごは、とりかえしましたが、きつねはすわったきり、にげませ
ん。」

「だから、ほうきで追っばらえといつのに。」

「ちきしょう。にげんか。しっ、しっ、しっ。」

と、正観はほうきで追いまくりました。

「ほうい、ちきしょう。こらっ。」

と正観は、そっちこっち追いかけて、とうとう外へにがしてしまいました。

「にげたか。」

「にげました。」

「正観。」

「はい。」

「なんでおまえは、今ごろ鐘楼なんぞへ、あがっていたのだ。」

「さびしかったから。」

「鐘楼へあがってれば、さびしくなくなるのか。」

「鐘をゲンコツでたたくと、おん、おん、おんと、和尚さんの声みたいな音がするんです。」

「なにをいいおる。」

和尚さんは、ころもをぬいで、ろばたで、おぜんにすわって、ざぶざぶと、お茶づけをながしこみはじめました。正観は、おみやげのだんごを、ひろげました。

「和尚さん。あの犬は、どこからついてきたのです。」

「となり村から、しつこく、あとをつけてきたのだよ。」

「どうして。」

「どうしてだか、知らないよ。」

「ばかじゃあ、しませんでした？」

「おれがきつねなぞに、ばかされてたまるかい。」

「きつねですか、あれは。」

「……………」

「犬みたいだったがな。そのしょうごに、正観はそばへよっても、ちっとも、こわくはなかつたがなあ。」

常念御坊は、はしをおいて、考えこんでいました。あんどんのあかりが、そのくるくる頭へ赤くさしています。

しばらくして、常念御坊は、

「正観。」

と、すこし、きまりわるそうにいいました。

「そのちようちんを、つけよ。」

「はい。」

「わしは、ちよつと行って、さがしてくるでな。おまえは、本堂のえんの下へ、わらをどっさり、入れといてくれ。」

「なにをさがしに？」

「あの犬を、つれてくるんだ。」

「きつねでしょう、あれは。」

「かわいそうに。犬なら、のら犬だ。食いものも、ろくに食わんとみえて、ひどくやせこけていた。はるばる、となり村から、わしについてきたのだから、あつたかくして、とめてやろうよ。」

それに、わしの落としただんごまで、ちゃんと、くわえてきてくれたんだもの。おれがわ

るいよど、これだけは心のなかでいって、常念御坊は、ちようちんをもって、出ていきまし
た。

2005年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さん
です。